

## 不登校児に対する家庭教師の役割

— 訓練中の心理臨床家としての一考察 —

福元理英

### 1. 問題と目的

2001年8月に文部科学省が発表した学校基本調査（朝日新聞掲載）によると、昨年度に30日以上欠席した子どものうち、心理的要因などで登校しないか出来ない「不登校」の小中学生は、前年度より4,000人（3.1%）多い13万4,000人（小学校26,000人、中学校10万8,000人）で、過去最多を更新したという。10~20%台で急増した96~98年度に比べて増加率は鈍化した。が、未だ増加傾向は続いているといえるだろう。

こういった状況を踏まえ、現在不登校児に対しては、多くの援助がなされるようになってきている。そしてその援助形態は、日常生活のなかで援助していくものと、専門的治療のふたつに大別される（梅沢 1988）。このうち専門的治療については、外来治療、訪問治療、収容治療の三つに分けられ、その機関としては、児童相談所や医療機関、情緒障害児短期治療施設などが挙げられる。ここでは個人療法、家族療法、集団療法、環境療法など様々なアプローチがとられており、それぞれにおいて効果をあげている。またそのなかで来談意欲の乏しい子どもに対しては、臨床心理的援助の一環として、訪問面接的アプローチが取られることもある。

心理臨床の分野においては、不登校児に対して家庭教師も行うという訪問面接者について、「臨床的家庭教師（平石 1997）」「家庭教師的治療者（福盛・村山 1993）」などと命名している。このことから、不登校児への訪問に対するニーズとして、学習と心理的援助の双方が求められており、そのふたつの役割を背負う「中間的な存在（神田橋 1990）」として、訪問面接者が捉えられているということがいえるだろう。

とはいえ、これは「治療を行う」家庭教師として、役割が明確化している際に見えることであって、例えば心理臨床の訓練を受けている段階の学生が、個人的に契約した場合の家庭教師においては、さまざまな問題点を自身で解決して行かざるをえない状況である。

そこで本研究では、研究Ⅰで、心理臨床の訓練を受けており、不登校児の家庭教師をしたことがある人にインタビューを行い、「家庭教師」としてなされている対応の分類を試みるとともに、研究Ⅱにおいて、筆者個人の経験についても振り返り、研究Ⅰで得られた家庭教師の対応の類型と照らし合わせ、さらにその経過についても

考察した。

### 2. 研究Ⅰ

＜方法＞①インタビュー対象者：心理臨床を専攻している愛知県内の大学院生で、過去・現在を問わず、「家庭教師というかたちで不登校児と関わった」人に、インタビューをお願いした（10名 男性2 女性8）。

②手続き：インタビューの所要時間は、30分から1時間で、インタビューの記録は、すべて被験者の承諾を得て、テープレコーダーで録音をした。インタビューの場所については、録音のことを考慮した上で、大学内の静かな部屋を用いた。

③インタビューの内容：インタビューについては、被験者に家庭教師の経験について自由に語っていただく中で、以下の4点にその内容が収束された。＜①どういった経緯で、家庭教師をすることになったのか ②学習をどのようなかたちで行っていたか ③親との関わりについてはどうだったか ④気をつけていたこと、及び家庭教師の役割についてどのように考えるか＞

④インタビュー結果の取り扱いについて：結果については、テープレコーダーに記録された内容を逐語録にした。それぞれの逐語録に関しては、家庭教師として関わっている上での家庭教師側の対応と、役割意識のプロセスについて考察するという目的をもって、質的分析を行うこととした。データに関しては、まず対象者が家庭教師として行っていた対応にあたることばと、家庭教師の役割について、具体的に述べられている部分を抽出した。その後、それぞれのデータから抽出したものについて、共通の役割と思われるものをまとめて概念化した。

#### ＜結果・考察＞

インタビュー分析の結果、子どもに対しては、「教育的側面の援助」「情緒的側面の配慮」「モデル的役割」「活動範囲を広げる役割」の四つの役割、親に対しては、「情報伝達的役割」「情緒的側面の支援」「ガイダンス的役割」の三つが見出された。

また、この両者への対応においては、臨床家として積極的に「治療」的関わりをしないという視点が多く語られていた。しかし、そのような態度を取るにあたって、家庭教師側には臨床的視点が働いており、その上で「家庭教師」として、子どもの心的負担にならないように配

慮されている様子が示唆された。

また研究Ⅰにおいては、彼らが家庭教師という役割を果たすなかで、あるプロセスをたどっていることが予測された。まず家庭教師は、自身が役割として感じているところ、つまり「教育的側面の援助」「情緒的側面の配慮」「モデル的役割」「情報伝達的役割」といった役割を果たそうとする。しかし、そういった役割を果たしながら子どもと付き合ったり、親に「情緒的側面の支援」「ガイダンス的役割」といった役割を果たしているうちに、治療的役割と家庭教師としての役割、双方のせめぎ合いが起きてくる。そういったなかで、家庭教師側は「枠」づくり、つまり自分の「不登校児に対する家庭教師」としての態度決定をせまられるということが示唆された。

### 3. 研究Ⅱ

<方法>分析対象：〔筆者〕分析対象である筆者は、家庭教師開始時、愛知県内の大学院の博士前期課程1年生であり、実践経験において全くの初心者であった。〔不登校女兒とその家族について〕子どもの名前は、松本さやかさん（仮名）、私立中学校（女子校）に通う1年生（当時）である。家族構成は、父（公立中学校教諭）、母（当時、大学院修士課程2年）、弟（たかし（仮名）；当時小3）であり、母方祖父母との関係が深い家庭であった。  
<経過>第1期〔勉強を中心に関わった時期（X年8月～X年12月）〕においては、筆者は勉強中心という姿勢をとっており、「教育的側面の援助」という役割を果たしていたものと思われる。そしてそこには、成績に対する不安を少しでも減ずることが、筆者のできることであるという役割意識があった。その後、第2期〔筆者の役割があいまいになる時期（X+1年1月～X+1年3月）〕には、母親が深刻な様子で家族についての悩みを持ちかけてきた。その際、筆者は母親の辛さを、初めて目の当たりにしたような思いになる。また同じ頃、さやかさんが全く勉強をしなくなり、比較的深い話をするようになったこともあって、筆者は自分の役割について悩み始めた。さやかさんに対する対応を考える上で、筆者の中にある、臨床家としての役割意識と家庭教師としての役割意識がせめぎ合いを始めたということがいえるだろう。第3期〔関係づくりの時期（X+1年4月～X+1年6月）〕、

さやかさんが学校を連続して休むようになったのをうけて、筆者は家庭教師の時間にコラージュを提案する。これは筆者が臨床家の方法を取り入れ、臨床的な媒介を通じて関係を深めようとしたことによる動きである。しかし、実際に臨床的な手法を取ってみたことで、筆者は彼女が「家庭教師」である筆者との関係を望んでいると感じ、自分自身の役割について改めて考え、「内的枠組み」をつくることの重要性を意識するようになる。

#### <考察>

研究Ⅱにおいては、筆者自身の経験について概観してきた。その内容からは、研究Ⅰで得られた役割を果たすことも重視されるべきであるが、そのような役割を果たすためにも、まずは子どもとの間に現実的・日常的な人間関係を作ることが重要であるということが示唆された。そして、そのためには、家庭教師側に「枠」づくりについて考えるということが求められるといえるだろう。特に筆者の例によると、臨床家としての訓練を受けていることで、「臨床家」として自分の学んでいることを「家庭教師」の場に持ち込んでしまう場合があるということがいえる。だがそのことによって、家庭教師としての日常的な関係の重要性に、家庭教師側の思いが及ばなくなってしまうということもありうるのである。それを防ぐためにも、「枠」をつくるということは、重要な視点であるということがいえるだろう。そのことによって、心理臨床を学ぶ学生が「家庭教師」としての役割を認識することは、子どもや親にとっても、「家庭教師」が果たす役割の範囲を示すこととなり、それが関係を作る上での安心感をうみ、関係が深まることにもつながることが予測される。そしてこういったことが「治療的に」役立つということはあるだろうが、それは実際の「治療」によってなされたものではないということ、家庭教師の側は認識しておくべきであろう。

しかし、このようななかにおいても、家族のなかに入って活動をするということを考えると、家庭教師側が臨床家としてのアイデンティティを揺るがしてしまう可能性はあるといえる。それは臨床家として訓練を受けている段階であるがゆえのことともいえるが、必要以上に臨床家としてのアイデンティティが揺らぐことを防ぐためには、「家庭教師」自身を支える人が必要であるということがいえると思われる。